

反党グループとソ連国内の反応

駒村 哲 社会科学教育講座

キーワード：反党グループ、フルシチョフ、世論

はじめに

「反党グループ」事件がスターリン後のソ連新指導部内におけるフルシチョフ派對反フルシチョフ派（「反党グループ」と言われる人たち）のいわゆる権力闘争であるという見方は一般的である。しかし権力の中核である政権をはなれて、国民（世論）に目を転じれば、そこには善悪二元論的な権力観とは異なる複雑かつ多元的な見方があることに気づくだろう。

本稿では「反党グループ」に対するソ連国内の反応（一応世論に近いもの）をアルヒーフ史料から読み解くことを課題とする⁽¹⁾。

1 ゴーリキー自動車工場の集会

まずはじめにゴーリキー自動車工場の労働者、技術専門家、事務職員の見意を見てみよう。

7月8日ゴーリキー自動車工場で、数千人の労働者、技術専門家、事務職員の集会（ミーティング）が行われ、ソ連共産党中央委員会6月総会を取り上げた。

中央委員会総会決議について私（イグナトフ・ゴーリキー州党書記—著者、以下同じ）の報告の後、集会（ミーティング）で発言したのは鉄工労働者クレメンチョフ同志、工作機工シュルィギン同志、職長ドゥビニン同志、研磨工プロフ同志。彼らは全員マレンコフ、カガノヴィチ、モロトフ及び3人に味方したシェピーロフら反党グループの分離活動を容赦なく弾劾し、第20回党大会決定の実現に力を費やし、威厳をもって10月（革命）40周年を迎える従業員の覚悟を表明した。

集会（ミーティング）の決議を読み上げた後、採択された決議の正しさに疑いを表明する3人の同志が発言の許しを執拗に求めた。

シャシー（車台）労働団のリャボフ同志曰く、『私は自分の番ではないことをもちろん謝ります。私は少し無知な話をしたい。私は無知な人間で、兄と半々に2学年を終了した。私の子供時代には、我が心臓部—モスクワでいくつもの混乱があったことは知っている。1935年に人々が死んだ等々。何か間違いが起こらないか今私は心配している。そしてとうとう私は発言する決心をした。何でも起こりうる。大衆が激昂し、多数がそれほど満足ではないようだ。私が言いたいのは、同志がここで発言し、諸君は発言を気にしている。抑えつけられた人民。発言の自由はあまりない。私が話したことを印刷させる。でも私は書こうとは思わない。私は話したい、ヴァチェスラフ・モロトフは40年働き、我々は信じたが、40年の最初の年に我々は少し怖じ気づいた。（叫び声：彼はいまは働いていない、だから信じない）私は言いたい。諸君は人々の運命を決めるが、誰でもよいわけではない』

鑄造ユニットの鑄造工クレヴァチェヴァ同志曰く、『私は労働者で、技師ではない。単純労働者、部品の鑄型を作っている。これらの同志のことで私は胸が痛む。彼らがどうなるかは知らない。もしその通りなら、我々労働者は非常に心配だ。どのくらい彼らはレーニン崇拝を続けて突然脇道へ曲がったのか。もちろんそれにはがっかりした。当然我々は党を支持する。もしその通りなら、我々労働者

働者は党の政策に大いに賛成である。でもどういうことになるのか。私は労働者の間を出入りして、労働者階級の声を知っている。しかし信頼状態から脱したようだ。私は個人的には信じなくなっている。私はコムソモールとしてなぜ毎年我々には新しいことが起こるのか分からないし、信じない。イグナトフ同志は何かを決定したと言うが、何を決定したのか。なにしろこの同志たちはよいことをとてもたくさんしたのだから。仮に彼らが道を逸れて、かつてのプレハーノフのように間違っただろう。しかしプレハーノフはレーニンとは少ししかいなくて、その後道を逸れた。彼を引き離すことはできた。しかしこの同志たちは何年も働き、よいことをたくさんした。そうしたら、この同志たちがいったい何をしたいのか今我々には知らせない。もしかしたら、彼らを非難して刑務所に入れるのかもしれない、若干の共産主義者たちがやったように。それこそスターリンだった。彼の時代、多くの誠実な労働者が亡くなった。いまでも私には理解できない。とんでもないことだ。(笑い) そうしたら労働者の声。そうだとでも労働者は考えている。労働者は指導部の人よりも政治をよく知っている、なぜなら彼ら自身働いているので。そしてこの同志たちがやりたいことに我々を素早く反応させる。なるほど彼らはよいことをたくさんした。もしこの同志たちスターリン、マレンコフ、モロトフが常に害を及ぼしたならば、私は戦争には参加しなかったが、我々は戦争で何にも勝利しなかっただろう。私はそれを信じない。ここでは多くの同志が登壇して我が工場の名称を変更する必要があると話した。私はそれが正しいとは思わない、同志たちは正しくないことを考えている。私は同志たちに私を支持するように頼む。この人たちはたくさんのよいことをした、もし彼らが間違いを犯したなら、しかたがない、彼らは古い人々なので、そのポストに新しい人を就け、そのため彼らを党から追放する。私はそのように考える』

自動車ユニットのショフリン同志が言うには、『マレンコフのときの方が今よりも自分の生活はよかった。マレンコフは手紙で私に答えたが、イグナトフ同志のところへは私の手紙は届かなかった。地区勤労者代表ソヴィエト執行委員会議長のセルゲーエフ同志のところへいっても、彼は決定せず、君は労働者であり、上司ではないと言う。私の生活は非常に悪い。娘は今入院中で私には陽が見えない』

提起された問題を再度出して説明しなければならなかった。この後集会（ミーティング）で満場一致で決議は採択された、その中で、自動車工場従業員はマレンコフ、カガノヴィチ、モロトフ及び3人の仲間であるシェピーロフら反党グループの分離活動を非難し、ソ連共産党中央委員会総会決定を全員一致で承認し、工場従業員は現在も将来も我が党とそのレーニンの中央委員会の信頼できる支柱であることを請け合った⁽²⁾。

以上ここではゴーリキー自動車工場の3人の労働者の発言を取り上げたのであるが、そこに見られるのは、反党グループを一方向的に非難するのではなく、マレンコフ、カガノヴィチ、モロトフらの過去の功績をある程度（具体的ではないが）評価するとともに現状（特に生活面で）における労働者の不満が決して小さくないことである。

2 ニージニー・ノヴゴロド州の党員会議

次にソ連共産党中央委員会6月総会決議討議に関して党員会議で出された質問を分析することにより、反党グループに対する国内世論を分析してみることにする。

ポグレビンスキー元ゴーリキー州内務人民委員部職員は人民の敵ですか。

すべての公債の抽選を 20-25 年間延期することは、国家財政強化のために必要であるが、改革後すでに発行され、労働者にとり非常に高価な公債のたとえ 2 %であってもなぜ残すことができないのか？また残りの公債に対しても、延期期間はあまりに大きくそれを変更できないか、というのは国民がそれを望んでいるので？

ソ連共産党中央委員会総会でのマレンコフ、カガノヴィチ、モロトフの発言や声明をソ連共産党員のためになぜ印刷物で公表しないのか？

マレンコフ、モロトフ、カガノヴィチは総会でどんな行動をしたのか？

ブルガーニン同志は閣僚会議議長の地位を占めているのか、これから占めるのか？

現在のように、スターリンの活動中、このような対立はなぜなかったのか？

シェピーロフ同志が外相ポストからはずされたのは何ゆえ？

中央委員会幹部会の会議でフルシチョフ同志に対して反党グループはいかなる告発をしたのか？

古参党活動家アンドレーエフは今どこにいるのか？

この同志たちは党から除名され、逮捕されるのだろうか、スターリンの個人崇拜のとき行われたように？

マレンコフ、モロトフ、カガノヴィチは各自の地位で働くのか、それとも解任されるのだろうか？

反党グループは何を発言したのか？理由を教えてください。

グループがそのような行動をしたとき、すべての会議にヴォロシーロフ同志はいたのか？

我が党の指導者たちがマレンコフ、カガノヴィチ、モロトフの行動と妥協するほど近視眼的なのはしかたがない、なぜ今ではなく、もっと早く総会に問題を提起しなかったのか？

中央委員会メンバーと会うために 4 人の代表が出てきたとき、なぜ長い間中央委員会メンバーを会議に入れなかったのか？誰がその代表を選んだのか、もし代表たちが横柄に振る舞ったなら、なぜなのか、フルシチョフ同志がその代表の中にいたのに？

住宅問題は今日でもまだ我々には切実である。なぜ指導機関は小家族の無駄な居住スペースを没収する措置をとらないのか。それについては新聞にたくさん書かれた。この問題は会議で提起され、労働者階級はこうした施策を行うよう執拗に求めている、たとえ余分な面積に対して家賃を増やすか、あるいは他のやり方でこの問題を実行するとしても、なぜだかそれは行われぬ。なにしろまさにこれはある程度、幹部職員と下部の、大衆との結びつきにある、基本的には幹部職員には余分な居住スペースがあるので。

労働者と住民は欧州貿易機構に対する不満を大いに表明する。時々でも聞きたくない。

個人崇拜についての手紙が検討され、その中でヴォロシーロフが危険に曝されて、スターリンが 1 人でみんなやったと語られたとき、今幹部会には新しい決定があり、何でこれが引き起こされたのか？

もしこれがすべて彼らの意志により起こったならば、なぜブルガーニンはまだ残っているのか？彼は国家保安機関に就いてたくさん誠実な同志を一掃したのに。

中央委員会第 1 書記フルシチョフ同志の略歴を述べてほしい。

なぜブルガーニン同志はソ連共産党中央委員会ビューローにとどまったのか？ブルガーニンも反党の陰謀に加担したので、彼は暴露したが、曰くオオカミを飼育してみたとして、森の方ばかり見ている（人の本性は変わらない）。

ソ連共産党第 20 回大会におけるマレンコフの発言に誤りがあったのか教えてください。

完全にはっきりさせるために、幹部会と中央委員会総会のすべての会議の速記報告書がなぜないのか？

モロトフ同志、マレンコフ同志、カガノヴィチ同志、シェピーロフ同志を召還して、大きな工業都市の工場党員集会を我々のところのソルモフスキー工場で開いて検討することを提案する。

モロトフ同志を党員から除名する件でゴリキーの党機関活動家の要求が何に基づくのか分からない。まったくもって正しくない振る舞いは、地下活動家、革命の闘士、偉大なレーニンの盟友としてのモロトフの大きな功績を貶めることはできないのか？

カガノヴィチは休暇と規定年限勤続による給料取り消しに反対し、今年規定年限勤続は支払われるのだろうかと言われる。

総会での自分の演説でモロトフ同志が言ったことについて、州アルヒーフにイグナトフ同志は報告したのか。彼は6時間演説した。トゥハチェフスキーとブリュッヘルは生きていいのかいないのか答えてほしい。

マレンコフ出席で、とりわけカガノヴィチの署名で、ソヴィエト人民の殺害が行われた、なぜ彼らはソヴィエト法の罰を受けないのか？

レーニンとともに活動した共産主義者たちは現在ソ連共産党中央委員会に入っているのか？

フルシチョフ同志はたくさん、あまりにもたくさん資本主義諸国を旅して回っているが、自国の最底辺はなぜ訪れないのか？さらに残りの閣僚はみんな彼を手本に行動している？

1937-38年の弾圧に関連して、かつての政治局メンバーの残りは責任を問われないのだろうか？

フルシチョフ同志が新しい決議を準備していること、1958年は国家休暇には支払いをせず、規定年限勤続には支払われるということは本当か？この噂が人々や工場の上司の間にさえ流れている。

建設とコルホーズ機関に関して、1938-1937（ママ）年にフルシチョフ同志にはどんな間違いがあったのか？

マレンコフ、モロトフ、カガノヴィチの総会での発言を公表してほしい、彼らが何を話したか我々は知らないのか？

イグナトフ同志がモスクワに呼ばれたが、何かの理由でそこに行かなかったというのは確かなのか？

古参の共産主義者を片づけて、栄光への道を彼が自分で開けなかったか、フルシチョフはスターリンのときになぜ正しく指導していないという問題を解決しなかったのか？

フルシチョフがヴォロシーロフを古参ボリシェヴィキとして罷免し、従順な少年として新人たちを任命するのに1年もかからない。

このときどのようにして60人の中央委員会メンバーがモスクワにいたのか？

反党グループにおけるシェピーロフ同志の役割は具体的に何か、これについてあなたの発言では話されなかったのか。この演壇からイグナトフ同志はシェピーロフがイデオロギー問題担当の最良の専門家として中央委員会機関に転任してきたこと、彼は外務省の機関で仕事をうまく片づけたことを私たち一工場の共産主義者に説明した。

フルシチョフ同志と他の指導者たちが資本主義諸国を旅して回っているのに、なぜ自分の祖国の底辺に行かないのか？彼らはビルマを旅して回り、これには映画ルポルタージュがあり、フルシチョフがゴリキーやコルホーズにいるように見えるのに？

レニングラード事件でモロトフ、マレンコフ、カガノヴィチは告発されるのか、そのときフルシチョフ同志はどこにいたのか？

それで規定年限勤続に支払う法律は[...]（判読不能）年に変更され、何でそれが引き起こされたのか、まったく正しいとは思わないのか。

現在我々の店頭には、肉も卵もソーセージもないのに、どうやって2年でアメリカを追い越すことができるのか？ミルクもいつもないのか？

スターリン個人崇拜の問題で第20回党大会のフルシチョフ報告は中央委員会選挙の前だったのかそれとも後だったのか？

第20回大会で1957年の公債支払いの申込み中止の問題は提起されたのか？

モロトフ同志、フルシチョフ同志は何年党員をやっているのか？

1)工業 2)農業 3)対外関係それぞれの分野で反党グループの方針は何で表明されたのか？

何が反党グループに指導部交代の問題を提起する気にさせたのか言ってください。

マレンコフ同志とはいったい何者で、彼はいかなる教育、出身などを有しているのか。彼がソ連共産党のメンバーとして多くのことを許され、それにもかかわらずソ連共産党中央委員会幹部会員に選ばれ、しかしながら、彼の権威は大きくなかったという事実は疑わしい。みんなこれに憤慨する。

ブルガーニン、ヴォロシロフ、その他のような共産主義者のレーニン政策実現で党内ましてや党指導部内に動揺はないのか？

ゴリキー自動車工場の改称を提案する。

処女地開墾不同意の件で何に対立が現れたのか？そして国民経済会議創設の不一致は？

なぜ4年間で物価の引き下げがないのか？

マレンコフが閣僚会議議長地位から解任されたことをソ連共産党中央委員会はソ連共産党員になぜ隠したのか、本人の希望によりと伝えたのに？

ソ連共産党中央委員会書記フルシチョフ同志を指導部から解任する件を反党グループが提起した動機あるいは理由は具体的に何だったのか言ってください。

個人崇拜についてのソ連共産党中央委員会の書簡で、マレンコフ同志は自ら辞任の表明を出したと言われたが、この書簡で彼が解任されたとあなたが読み上げたのはなぜか？

レニングラード250年を祝してその訪問時に、労働者、技術専門家、従業員の次回休暇についてフルシチョフ同志は質問したのか？

ベリヤに関して上述の書簡では、党の前衛かつ献身的な指導者殺害におけるその協力者について何も語られなかったのはなぜか？

反対の方針あるいはその綱領が何なのかあまりはっきりしない、それらが正しくない限り、我々にはすべてがはっきりしない、なぜその綱領が公表されず、あるいはラジオで表明されたのか、当時はすべてははっきりしていただろうか？

総会でフルシチョフは何を話したのか？

レーニン主義からスターリン主義に移るときがやってきたというようなことをスターリン60歳の日にカガノヴィチは自分の話で言ったのか答えてほしい。

マレンコフ、モロトフ、カガノヴィチの指導下、政府内とりわけグループ内でポストをめぐる闘争あるいは党の政策逸脱があった。

ブルガーニン同志が反党グループ支持に同意し、ソ連閣僚会議のポストから国家保安委員会議長のポストに移るのはなぜか？

はたして党の末端組織の共産主義者が我が党の正しい路線あるいはマレンコフその他の冒険主義を見分けることができないのか？なぜ彼らはそれを当てにしたのか？

働いている人々の数に応じて現在つくられたソフホーズは管理定員を縮小するのかあるいは逆か？

2,3の連邦共和国がある、例えばラトヴィアとグルジアその他、そこには社会主義体制に対して軽

蔑的な態度をとる人々がたくさんいる。そこにつくられるソフホーズは其中でおそらく社会主義建設と我が民族政策に害を与えないようこうした共和国の代表を働かせるだろう。

マレンコフ、カガノヴィチ、モロトフを党から除名するのか？

モロトフ⁽³⁾が自らの発言で自分の誤りを認めたのはなぜか、ソ連共産党中央委員会総会決定投票の際、棄権したのは？

反党グループは党で討議する問題を提起したのか⁽⁴⁾？

以上党員会議での質問から注目すべきは、第1に、労働者（国民）はそもそもマレンコフ、カガノヴィチ、モロトフ、シェピーロフらが中央委員会総会でいかなる言動を行ったのかという基本的（具体的）事実さえ、知らなかったあるいは知らされていなかったということである。労働者が会議の記録を公開するよう求めたのは当然である。

第2に、反党グループとして指摘された上記4人以外にヴォロシーロフとブルガーニンの2人に対しても疑いの目が向けられていた点である。

第3に、フルシチョフの頻繁な外国訪問を批判したり、スターリン時代のテロ・抑圧に対する彼の責任に言及した質問がこの時点であったことはある意味驚きである（後のフルシチョフ解任の遠因とも言えるのではないか）。

第4に、フルシチョフ解任を要求した反党グループの動機あるいは理由を具体的に質問しているという点は本事件の核心の1つに迫るものであろう。

最後に、ソ連国内に社会主義体制に否定的な人々がたくさんいるという指摘は何を意味するのか（そもそも党の公式記録で言及されていることの重大性を見逃せない）。

おわりに

従来の研究では主として「反党グループ」事件をソヴィエト国内政治の権力闘争としてのみ捉える傾向が一般的である。

そこで「反党グループ」側から見ると、フルシチョフ個人に大きな不満があり、彼の国内及び対外政策に反対であり、それゆえフルシチョフを第1書記の地位から解任して党指導部の実権を掌握しようとしたのである。

それに対してフルシチョフ支持者側から見ると、反フルシチョフ勢力は幹部会で多数派を形成したとはいえ、単なる寄せ集めにすぎず、マレンコフ、カガノヴィチ、モロトフら反フルシチョフ勢力を党の公式路線に反対する「反党グループ」として国民（労働者）の前で非難する必要があったのである。

しかしながら、本稿の考察から明らかなように、政治の中核における権力闘争に対してソ連の労働者（国民）は善悪二元論では割り切れない多元的な意見（見方）をもっていたのである。

注

(1) この時代の背景（政治状況）と公表されたアルヒーフ史料について以下参照（[1] c. 10-11.）

1950年代は国を挙げて政治関係において波乱に満ちた時代だった。スターリン死後党指導部内では政治リーダーシップをめぐる激しい闘争が数年にわたって行われた。ベリヤの政権からの解任が、フルシチョフと、モロトフ、カガノヴィチ、シェピーロフに支持されるマレンコフとの間で繰り広げられた権力闘争を強めた。対立は次のような基本的局面にかかわっていた、

すなわち経済改革、目の前で起こっている変化に対する社会の役割、そのほか対外政策上の戦略方針の変更。

1956年2月のソ連共産党第20回大会で、スターリンの個人崇拝を暴露してフルシチョフは政治的勝利を得た。

1957年6月、フルシチョフ不在中のソ連最高会議幹部会の会議で、ブルガーニン、ヴォロシーロフ、カガノヴィチ、マレンコフ、モロトフ、ペルヴーヒン、サブローフはフルシチョフの辞任を要求した。

フルシチョフは、『民主集中制のレーニン原則』を主張して、この問題を党中央委員会で検討するよう求めた。

1957年6月22日召集された中央委員会総会はフルシチョフを支持して、幹部会の表決を取り消し、モロトフ、カガノヴィチ、マレンコフの『反党グループの分派活動』を非難し、中央委員会のメンバーから除名した。

1957年6月の政治危機は非スターリン化路線において重要な成功だった。

50年代の国家及び党の指導部カードルの移動・転、経済運営（ソヴナルホーズ創設）の変更、農業政策方針（処女地開発）に随伴していた国家指導部の激しい政治闘争が社会的意識を不安にさせ、騒がせた。

社会は全体として、目の前の出来事を意味づける時間を必要としていたが、また過去においてニージニー・ノヴゴロド州のきわめて権威ある指導者、モロトフやカガノヴィチのような著名な党活動家の分派活動批判が一理あるように世論を説得するため、共産主義者と広汎な住民層の間で大きなプロパガンダ活動も必要であった。

『マレンコフ、カガノヴィチ、モロトフの反党グループについて』という1957年6月20-22日のソ連共産党中央委員会総会決議で、仕事上の見込み違いを列挙され、分派の見解と活動を『党活動のレーニン規範』に合致しないものと根拠づけられた。

しかしながら、公表される文書によれば、集会（ミーティング）での勤労者の発言に、時折大騒ぎや戸惑い、動揺が支配的であった。彼らが目の前の出来事を理解するのは難しく、名前を耳で聞いただけの指導者たちが党内民主主義の規範とレーニンの指導原則に違反したと信じるのは困難であった。

労働者の集会（ミーティング）、会議では州の党指導部とともにフルシチョフ自身も批判された。国内の政治問題に言及して、彼らは社会政策、住宅問題未解決の不満を表明した。ニージニー・ノヴゴロド州国家社会政治アルヒーフから公表される文書によれば、労働者はやっとのことで反党グループの存在を信じた。

同時にゴーリキー州の党指導者たちは、中央委員会6月総会の決定を支持するため、中央委員会の旧メンバーの経歴、例えば、モロトフの職務上の見込み違いや落ち度を詮議した。

広汎な勤労者層の側からのフルシチョフの政治活動評価が完全には一致しないことが、権力と社会の分離をもたらし、そのことが党の権威を掘り崩し、後に彼の辞任に影響した。

(2) [1] c. 11-12.

(3) モロトフの過去（1920年）の誤りについては以下参照（[1] c. 17-18.）

マレンコフ、カガノヴィチ、モロトフの反党グループについてソ連共産党中央委員会6月総会決定を検討する党員集会が行われている間、州党アルヒーフ管理人がニージニー・ノヴゴロドの第10回グベルンスキー党協議会（1920年7月15-19日）の議事録と1920年分のグベルンスキー党委員会幹部会の会議議事録書類を州委員会に提出した。

上述したアルヒーフ文書から明らかなのは、この時期ニージニー・ノヴゴロドのグベルンスキー執行委員会議長として働いていたモロトフ同志は最近まで自慢していたほど誤りを犯さないレーニン主義者では決してなく、当時、1920年にグベルンスキー委員会幹部会に対してデマゴギー的グループの組織化に携わっており、党内民主主義と規律の原則に違反したことである。こうした誤った行動に対して、ニージニー・ノヴゴロドの第10回グベルンスキー党協議会はモロトフを厳しく非難し、彼を懲戒したが、グベルンスキー委員会総会では彼はグベルンスキー党委員会幹部会のメンバーに選出されなかった。

しかし、ニージニー・ノヴゴロドのグベルンスキー委員会幹部会の議事録から明らかなように、この教訓はモロトフの得にはならなかった。第10回党協議会后、彼は誤った振る舞いをしたグベルンスキー党委員会幹部会に対して高慢かつ横柄に振る舞い、その決定を遂行しようとし、グベルンスキー委員会がグベルンスキー執行委員会の活動を邪魔するまで極端に陥った。

こうして 1920 年 7 月 27 日付グベルンスキー委員会幹部会の会議で、グベルンスキー党委員会幹部会議長のクズネツォフ同志の質問で、協議会で見受けられた食い違いを考慮して職員がその中に残っているグベルンスキー委員会の古参メンバーと仕事はできないというモロトフの声明の後、彼が現在（すなわち第 10 回党協議会で選出された）グベルンスキー委員会と一緒に仕事ができるかどうか？

モロトフは答えた、『グベルンスキー委員会のこのようなメンバーと仕事ができるか？党の活動に対して責任を負っていないソヴィエトの仕事で仕事はできると私は考える…ある部分でグベルンスキー執行委員会の活動の邪魔をしたという自分の発言を否認して』

グベルンスキー執行委員会議長になってモロトフ同志は正しくない立場に立ち、党機関のコントロールから離れ、ソヴィエトにおける党の指導的役割を否定しようとしたことがこのことから分かる。

第 10 回党協議会后、モロトフ同志はグベルンスキー党委員会幹部会よりも自分を重視し続けたが、独りぼっちになり、ニージニー・ノヴゴロドの党機関で何の支持も得られず、1920 年 8 月 9 日付グベルンスキー党委員会幹部会決議（議事録第 12 号）で彼はグベルンスキー執行委員会議長のポストから解任され、中央委員会掌握下に送られた。

(4) [1] c. 13-16.

参考文献

- [1] 《Я не верю этому》. Отклики трудящихся на решения июньского (1957 г.) пленума ЦК КПСС.
Исторический архив, 2000, No.1, c. 10-20.
- [2] 拙稿『『反党グループ』事件に関する一考察（1）—1957年6月ソ連共産党中央委員会総会速記録を手がかりに—』
『信州大学教育学部紀要』（第86号、1995年12月、125-134頁）
- [3] 拙稿「中央委員会総会（1957年6月について）」『信州大学教育学部紀要』（第88号、1996年8月、107-118頁）
- [4] 拙稿『『反党グループ』事件とその後』『信州大学教育学部紀要』（第89号、1996年12月、87-98頁）
- [5] 拙稿『『反党グループ』事件後のソ連(1)—ウラルに追放されたカガノヴィチ（1957-1958年）—』
『信州大学教育学部紀要』（第117号、2006年3月、131-140頁）

(2006年11月17日 受理)